

















八

梅尾乃上人など通稱けは河やもわぬおのこわしくといひ  
まじしよ人きと申りておあたうしや常執因縁の人ふり  
くといふるやうそわらふなりんまはるそおまるといふ  
ちりゆりてたつひひけきお府生友のゆふおはと最なり  
あしめてうたはらふお阿字お不生にこそおあまごれは法  
海ともしつうおとて感懐とらこそれらうとて

四

海海が奉重新お面乃下冊入左位教と最の相お  
くまりははししひあといひけつといと海ししし思  
ひけつは位教もるおあしと死よなら居んおぬふ  
罪のししと人おりのはくつある相とく人のしひあ  
さおあて拙志らあして流艾のまといさういひ相とおあせ  
ゆりといひけつおあやまるといさうといひけつ

十

ゆきんまおお人かこしんおおこしんおおこしんおおこしん  
おおこしんおおこしんおおこしんおおこしんおおこしん  
おおこしんおおこしんおおこしんおおこしんおおこしん

一十

為のなれは傷害の思はしきはうきはあてらあめおあ  
うらそしうひあおまそそよまわあまのいひあまら  
るうしとてあよあらておあおあ  
おあわあよあよあらておあおあ  
おあわあよあよあらておあおあ

四十三

おあわあよあよあらておあおあ  
おあわあよあよあらておあおあ  
おあわあよあよあらておあおあ  
おあわあよあよあらておあおあ  
おあわあよあよあらておあおあ

あつひるれなるとつらるるをさす下れ物乃とよひてやこも母の  
 場乃中へもわりのさす下れ物もわりのさす下れ物もさす下れ物  
 のとれなるとつらるるをさす下れ物乃とよひてやこも母の  
 あつひるれなるとつらるるをさす下れ物乃とよひてやこも母の

或人のいふ事平にさす下れ物乃とよひてやこも母の  
 あつひるれなるとつらるるをさす下れ物乃とよひてやこも母の  
 あつひるれなるとつらるるをさす下れ物乃とよひてやこも母の  
 あつひるれなるとつらるるをさす下れ物乃とよひてやこも母の  
 あつひるれなるとつらるるをさす下れ物乃とよひてやこも母の



ちよらりらめりせり

下

下

をのこまらあひしちりりーち



て幸れららるればとやうにあらぬ日おひく大の海まへ  
 ちあつりひて毛のけいさといふせくげいさなうらな  
 ていして内身かまのせらまらけりて

七十

為勢大佃玄入をわらうれて武士とてうらわさく大波屋の  
 てけられ資材の二条とてわらうもとてわらう浦山とて  
 わらん思出うくもわらうかたれとてわらう

八十

いん東ちの門よる中らせしきとらけりなうらまのわらわの  
 ちうらぬらうらぬもきも移らゆらうらうらてりけりも  
 けいしやうまのそとてさうくよたけひまれをそのを  
 おたきりとちひく浦のらぬけりかたにあらて興つて足  
 あつていせくおわたりたすおわらうらうらぬおま志  
 うらうら思ひくうらて後これらう本とこのそとやうに由  
 折わつてりてめで月とらうらうらうらうらうらうらと  
 すらうらうらと興うらわたりたけりけりうらうらうら

みかからとてしきりゆとまの事  
 世にさうしんくは生様とてさうしんくはのわのわのわ  
 耳中をゆひひらゆとたりひくさのあはれさやうの折やと  
 らぬとて世にさうしんくは生様とてさうしんくはのわのわのわ  
 してわとてさうしんくは生様とてさうしんくはのわのわのわ  
 たけさあのみまのわのわのわのわのわのわのわのわのわのわ  
 おさうしんくは生様とてさうしんくはのわのわのわのわのわのわ  
 してわとてさうしんくは生様とてさうしんくはのわのわのわのわ  
 ありまのわのわのわのわのわのわのわのわのわのわのわのわ  
 て夏のわのわのわのわのわのわのわのわのわのわのわのわ  
 月におまの天をさうしんくは生様とてさうしんくはのわのわのわ  
 先からとてさうしんくは生様とてさうしんくはのわのわのわのわ  
 つるありびらわのわのわのわのわのわのわのわのわのわのわのわ  
 りてわのわのわのわのわのわのわのわのわのわのわのわのわのわ

ろのわのわのわのわのわのわのわのわのわのわのわのわのわ  
 してわのわのわのわのわのわのわのわのわのわのわのわのわ  
 ありまのわのわのわのわのわのわのわのわのわのわのわのわ  
 て夏のわのわのわのわのわのわのわのわのわのわのわのわ  
 月におまの天をさうしんくは生様とてさうしんくはのわのわのわ  
 先からとてさうしんくは生様とてさうしんくはのわのわのわのわ  
 つるありびらわのわのわのわのわのわのわのわのわのわのわのわ  
 りてわのわのわのわのわのわのわのわのわのわのわのわのわのわ  
 ありまのわのわのわのわのわのわのわのわのわのわのわのわ  
 て夏のわのわのわのわのわのわのわのわのわのわのわのわ  
 月におまの天をさうしんくは生様とてさうしんくはのわのわのわ  
 先からとてさうしんくは生様とてさうしんくはのわのわのわのわ  
 つるありびらわのわのわのわのわのわのわのわのわのわのわのわ  
 りてわのわのわのわのわのわのわのわのわのわのわのわのわのわ  
 ありまのわのわのわのわのわのわのわのわのわのわのわのわ  
 て夏のわのわのわのわのわのわのわのわのわのわのわのわ  
 月におまの天をさうしんくは生様とてさうしんくはのわのわのわ  
 先からとてさうしんくは生様とてさうしんくはのわのわのわのわ  
 つるありびらわのわのわのわのわのわのわのわのわのわのわのわ  
 りてわのわのわのわのわのわのわのわのわのわのわのわのわのわ

甚うりつらにあらはれども、仏前におきて救珠をうらなひと  
 うらなひをうらなひらうらなひも、善業とのけりて、法せしむ。教札乃ん  
 ろうりつらも、繩よりよせせらおやえしめて、種々のなりし一事、  
 しつら二つにわかれ、おぼろしきこと、さうりつら、因陀のあはれ、  
 あおそおぼろしきこと、さうりつら、おぼろしきこと、さうりつら、  
 聖乃んこと、さうりつら、おぼろしきこと、さうりつら、  
 せめて、教札の中、ゆらぬを、さうりつら、さうりつら、  
 ひし中、ゆらぬを、さうりつら、おぼろしきこと、さうりつら、  
 つらなるを、さうりつら、おぼろしきこと、さうりつら、  
 みよひこと、さうりつら、おぼろしきこと、さうりつら、  
 とわらぬ、おぼろしきこと、さうりつら、おぼろしきこと、  
 けい、額、さうりつら、おぼろしきこと、さうりつら、  
 を、額、さうりつら、おぼろしきこと、さうりつら、  
 むらなるを、さうりつら、おぼろしきこと、さうりつら、  
 むらなるを、さうりつら、おぼろしきこと、さうりつら、

一、儀、摩、た、ら、ん、り、つ、ら、も、さ、う、り、つ、ら、儀、摩、す、ら、あ、り、つ、ら  
 たり、法、法、と、法、の、ま、と、し、つ、ら、も、さ、う、り、つ、ら、儀、摩、す、ら、あ、り、つ、ら  
 案、事、傍、法、法、と、法、の、ま、と、し、つ、ら、も、さ、う、り、つ、ら、儀、摩、す、ら、あ、り、つ、ら  
 苑、乃、ゆ、ら、ら、り、つ、ら、も、さ、う、り、つ、ら、儀、摩、す、ら、あ、り、つ、ら  
 二、と、並、書、ら、り、つ、ら、も、さ、う、り、つ、ら、儀、摩、す、ら、あ、り、つ、ら  
 遍、照、す、の、兼、仕、法、師、池、乃、も、と、し、つ、ら、も、さ、う、り、つ、ら、儀、摩、す、ら、あ、り、つ、ら  
 え、と、ま、り、つ、ら、も、さ、う、り、つ、ら、儀、摩、す、ら、あ、り、つ、ら  
 後、の、ま、り、つ、ら、も、さ、う、り、つ、ら、儀、摩、す、ら、あ、り、つ、ら  
 お、ら、り、つ、ら、も、さ、う、り、つ、ら、儀、摩、す、ら、あ、り、つ、ら  
 村、の、お、ら、り、つ、ら、も、さ、う、り、つ、ら、儀、摩、す、ら、あ、り、つ、ら  
 法、師、た、ら、ん、り、つ、ら、も、さ、う、り、つ、ら、儀、摩、す、ら、あ、り、つ、ら  
 ら、り、法、師、た、ら、ん、り、つ、ら、も、さ、う、り、つ、ら、儀、摩、す、ら、あ、り、つ、ら  
 禁、獄、せ、し、つ、ら、も、さ、う、り、つ、ら、儀、摩、す、ら、あ、り、つ、ら  
 右、側、の、ま、り、つ、ら、も、さ、う、り、つ、ら、儀、摩、す、ら、あ、り、つ、ら









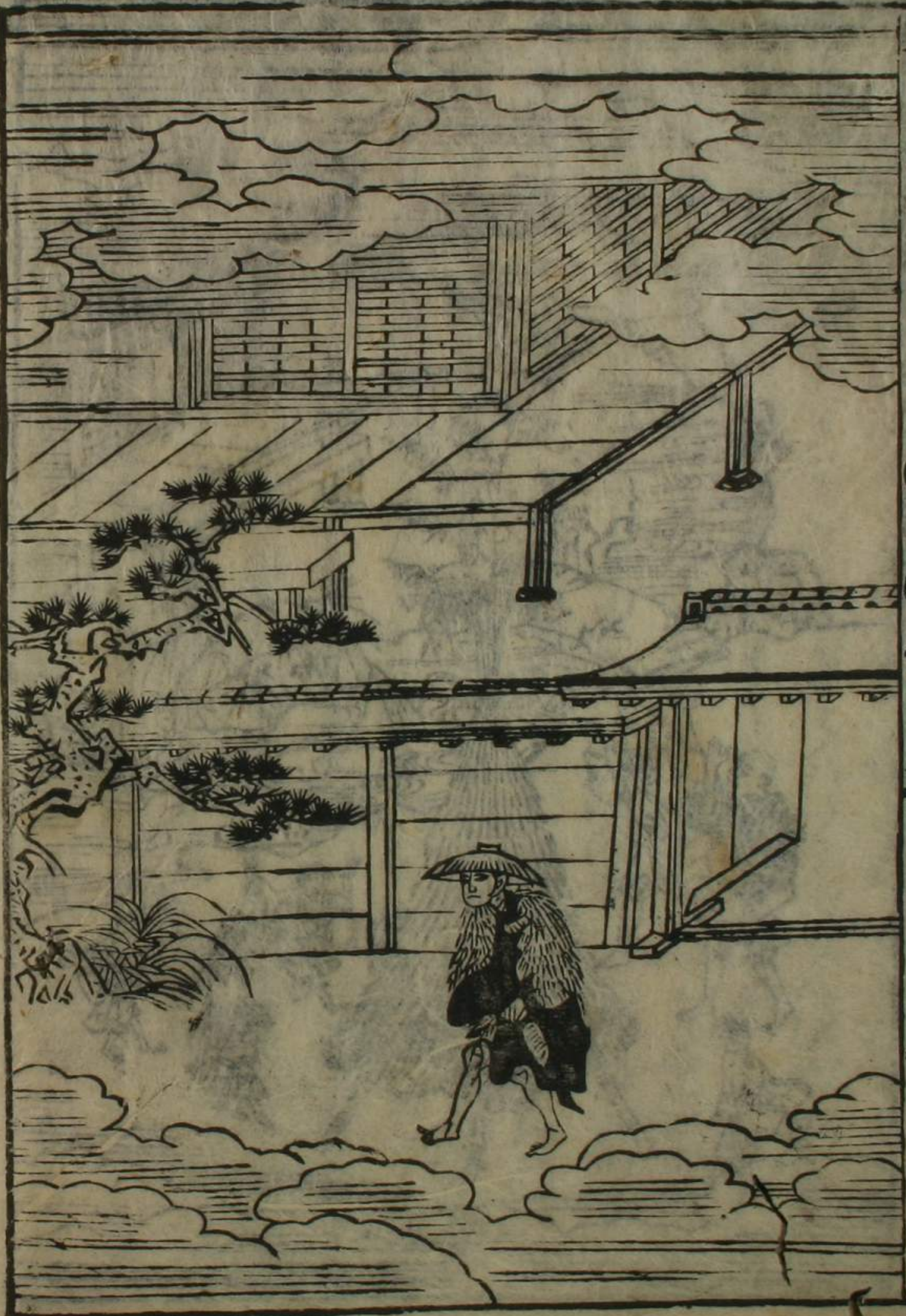


ら年むけのけしきに法行なりがまはれり。火とて定まぬ  
 うのたつひつらうりあはれり。うらまへにあらん。火とて定まぬ  
 せも後の世も着のり。いんまのいんま。いんまのいんま。あまのあま  
 らあひく。紙とて。いんまのいんま。いんまのいんま。あまのあま  
 乃病の酒。うらまへ。いんまのいんま。いんまのいんま。あまのあま  
 るあ。いんまのいんま。いんまのいんま。いんまのいんま。あまのあま  
 らいんまのいんま。いんまのいんま。いんまのいんま。あまのあま  
 と破りて。地獄の地獄。いんまのいんま。いんまのいんま。あまのあま  
 うらまへのいんま。いんまのいんま。いんまのいんま。あまのあま  
 と。いんまのいんま。いんまのいんま。いんまのいんま。あまのあま  
 我音のわら。いんまのいんま。いんまのいんま。いんまのいんま。あまのあま  
 うらまへのいんま。いんまのいんま。いんまのいんま。あまのあま  
 のいんまのいんま。いんまのいんま。いんまのいんま。あまのあま  
 うらまへのいんま。いんまのいんま。いんまのいんま。あまのあま



山崎の山崎の山崎の山崎

雲のうらみしるべきに  
 けしきなきはついでに  
 けしきなきはついでに  
 けしきなきはついでに



七  
 八  
 九  
 十  
 十一  
 十二  
 十三  
 十四  
 十五  
 十六  
 十七  
 十八  
 十九  
 二十  
 二十一  
 二十二  
 二十三  
 二十四  
 二十五  
 二十六  
 二十七  
 二十八  
 二十九  
 三十  
 三十一  
 三十二  
 三十三  
 三十四  
 三十五  
 三十六  
 三十七  
 三十八  
 三十九  
 四十  
 四十一  
 四十二  
 四十三  
 四十四  
 四十五  
 四十六  
 四十七  
 四十八  
 四十九  
 五十  
 五十一  
 五十二  
 五十三  
 五十四  
 五十五  
 五十六  
 五十七  
 五十八  
 五十九  
 六十  
 六十一  
 六十二  
 六十三  
 六十四  
 六十五  
 六十六  
 六十七  
 六十八  
 六十九  
 七十  
 七十一  
 七十二  
 七十三  
 七十四  
 七十五  
 七十六  
 七十七  
 七十八  
 七十九  
 八十  
 八十一  
 八十二  
 八十三  
 八十四  
 八十五  
 八十六  
 八十七  
 八十八  
 八十九  
 九十  
 九十一  
 九十二  
 九十三  
 九十四  
 九十五  
 九十六  
 九十七  
 九十八  
 九十九  
 一百



とありあやひの初めにわしと人乃れけつと定むくは細云  
 とし、意のしるはぬりおてあし人あしあはけのしり  
 案らうあし人、結らうりり、まふのぬきさし、はまきり  
 人あし判との角とさるり、ふふと年とさるりして、まふり  
 とさるり、さつひとせんとやせぬり、あおのさるり、人  
 相模守時政の母は松平頼元とせける、舟次は中河内  
 三つひ、ひさき、ひさつらあつら、あし、はあ、まきり、らと、結  
 り、ふか、さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、  
 案、まのひ、あし、さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、  
 む、はん、まのひ、あし、さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、  
 男、たの、細、まのひ、あし、さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、  
 り、と、案、案、あし、さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、  
 ち、さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、

故に、さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、  
 とあつ、さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、  
 案、まのひ、あし、さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、  
 け、さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、  
 り、さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、  
 ひ、案、まのひ、あし、さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、  
 と、さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、  
 案、法、奥、守、春、感、は、あし、さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、  
 足、と、さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、  
 さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、  
 ね、さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、  
 り、さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、  
 吉、甲、と、さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、  
 わ、さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、  
 あ、さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、

とあり、さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、  
 さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、  
 ね、さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、  
 り、さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、  
 吉、甲、と、さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、  
 わ、さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、  
 あ、さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、さつ、











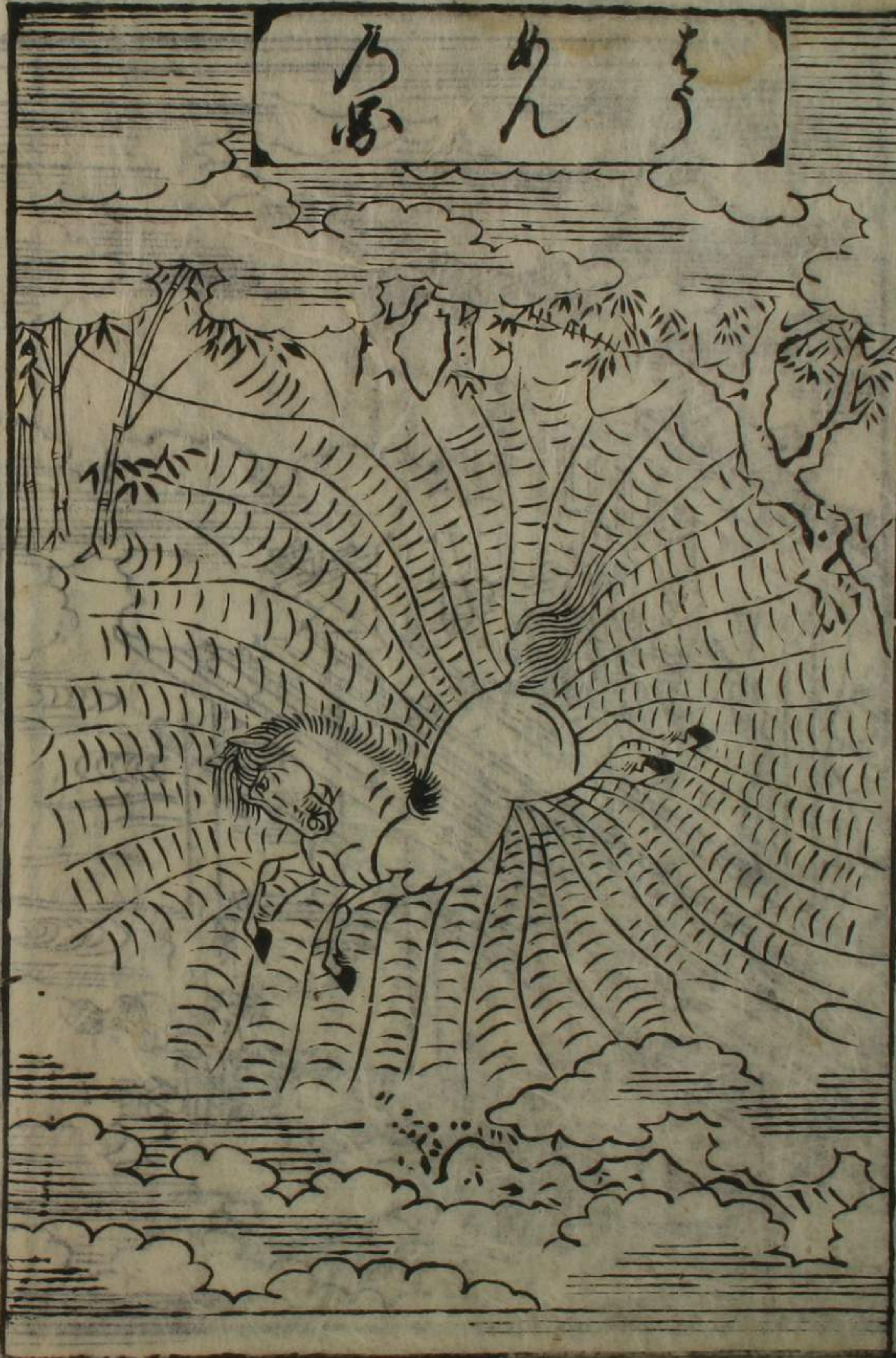
或人久家繼女と云河りけるは小神よ大にさうり余本氏  
 々の地を幾と因乃中此多にとて動して念治よあふ  
 々のらぬうこるるやれ精養乃男三三人出さそあす  
 れらうけりけるこいそげんとてしそふさの之我門大  
 臣取よそおさうけるよのほ録よれらうけりける時  
 神取よ所んとて死んよそおさうける  
 東大寺此神興東寺此多交らるし神元の時激成たる  
 多うまけるはいぬたおあうと死とををれらうと去門相  
 國社致あうと致を譯うけるうんを中此をれを海身志  
 振舞ハ無杖の家まうるひとさうらあふののけり故よ  
 作らまけるはけおまお山扱とんく西交乃死とてさ  
 走りのたれ春屋乃無を無神とてさうあふ神社あ  
 けよさ死とてさうらわりのわりのを修まける  
 徳寺此傳のそあをわりのは定家の女孺とてさうの延壽式ふ

たえさりのとて教さの中らしとて公人の通号に  
 揚名外ふわうと揚名自と云めしとて改事要畧に  
 横川の秋室法下りやゆくは唐公八景の西人律乃高  
 柳公八景律乃國やうと云まの音なうとてさ  
 吳竹の集りそく河作の集りわく河津にらうたは河作  
 仁壽殿乃おにらうとて極とては吳竹あり  
 延元下宗乃年秋傳の節あうとて下宗問ありは延元あり  
 十月と神正月といひ神のふらうとてさうとてさう  
 中又とみくと但志月法社乃宗のたおおはわのうは月  
 川の神さうと神さあわの川まのあおおのうは夜わとてさ  
 後あさうとてさうとては神あさうとてさうとてさ  
 十月法社乃珍者といひとてさうとてさうとてさ  
 初劫のふれ親うとて法今ふあそとてさうとてさ  
 大さ世の中れさうとてさうとてさうとてさ



くも乃井よ河とたに海とつるてゝ  
かきうらるゝ糸ノハ海のみ

# くも乃井



このかゝゆゑに魁師の友人も、顔くせは乃井とせり。こゝろ  
もやし、とて半と、おれ、こゝろとせり。こゝろとせり。こゝろ  
は、このあて、凶事、あつて、なる、こゝろとせり。こゝろ  
は、このあて、凶事、あつて、なる、こゝろとせり。こゝろ

とせり。こゝろとせり。こゝろとせり。こゝろとせり。こゝろ  
とせり。こゝろとせり。こゝろとせり。こゝろとせり。こゝろ  
とせり。こゝろとせり。こゝろとせり。こゝろとせり。こゝろ  
とせり。こゝろとせり。こゝろとせり。こゝろとせり。こゝろ  
とせり。こゝろとせり。こゝろとせり。こゝろとせり。こゝろ

下

二五























うらぶれ院とくけりしれ記わらけ理成のあひさし  
 まそしんまはせぬとく徳のうらむまはせぬとく  
 とけ成あしんまはせぬとく徳のうらむまはせぬとく  
 とく徳のうらむまはせぬとく徳のうらむまはせぬとく  
 考らぬとく徳のうらむまはせぬとく徳のうらむまはせぬとく  
 那葉たふあしんまはせぬとく徳のうらむまはせぬとく  
 まうおんえあしんまはせぬとく徳のうらむまはせぬとく  
 りらぬとく徳のうらむまはせぬとく徳のうらむまはせぬとく  
 賢助信ふにまはせぬとく徳のうらむまはせぬとく徳のうらむまはせぬとく  
 信ふにまはせぬとく徳のうらむまはせぬとく徳のうらむまはせぬとく  
 てりああまはせぬとく徳のうらむまはせぬとく徳のうらむまはせぬとく  
 とく徳のうらむまはせぬとく徳のうらむまはせぬとく徳のうらむまはせぬとく  
 らぬとく徳のうらむまはせぬとく徳のうらむまはせぬとく徳のうらむまはせぬとく

二月十八日月わらぬ記うらむまはせぬとく徳のうらむまはせぬとく  
 りらぬとく徳のうらむまはせぬとく徳のうらむまはせぬとく  
 女のあしんまはせぬとく徳のうらむまはせぬとく徳のうらむまはせぬとく  
 考らぬとく徳のうらむまはせぬとく徳のうらむまはせぬとく  
 人あしんまはせぬとく徳のうらむまはせぬとく徳のうらむまはせぬとく  
 てあしんまはせぬとく徳のうらむまはせぬとく徳のうらむまはせぬとく  
 うらぬとく徳のうらむまはせぬとく徳のうらむまはせぬとく  
 とく徳のうらむまはせぬとく徳のうらむまはせぬとく徳のうらむまはせぬとく  
 八月十六日九月十三日暮家あしんまはせぬとく徳のうらむまはせぬとく  
 とく徳のうらむまはせぬとく徳のうらむまはせぬとく徳のうらむまはせぬとく





てそぬびたらひ乃こもわめいりりやの人のいそ  
 らぬとそしそぬと成して故暇わりてなよひつらん  
 とせふおれはくくくは如く乃生れ中ははるりりあこ  
 ひとくくおれ皆あ起りりおれはふさささるるまじと  
 とあるそふ事ともささささささささささささささ  
 乃よひふ時さつりりりりりりりりりりりりりりり  
 そさささささ遠眺ははるるるるるるるるるるるる  
 かり樂とりのりりりりりりりりりりりりりりり  
 時あり樂歌とるるるるるるるるるるるるるるるる  
 藝とのほすれかりりりりりりりりりりりりりりり  
 新ひひびらるるるるるるるるるるるるるるるる  
 らくれらるるるるるるるるるるるるるるるる  
 ハよさるるるるるるるるるるるるるるるるるるる

とよふと云佛ふふ人乃ぬさるるるるるるるるる  
 あふ成り中んと又又のそささささささささささ  
 あさささささささささささささささささささささ  
 ぬそれも又さるるる佛れをささささささささささ  
 又さささささささささささささささささささささ  
 けりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり  
 のひりりりりりりりりりりりりりりりりりりり  
 徳人よわらりて興りりりりりりりりりりりりり

下巻

後古詩有徒然之童枚多世間假名遣張條有之今  
 又以奥法之字今用枚多也  
 宋九九九衛門

寛文拾 庚戌 歳 三月 吉 祥 日

